
小さな親切、大きなお世話

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな親切、大きなお世話

【Nコード】

N2998I

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

あなたは誰かの役に立ったことがあるだろうか。例えば僕は否だ
と思う。 タイトルの印象よりは暗い話ですm() () m

あなたは誰かの役に立ったことがあるだろうか？

例えば僕は否だと思う。

思い出して欲しい。

電車でお年寄りに席を譲った人がいるだろう。

友人の相談に乗って感謝された人が居るだろう。

それらは果たして本当に役に立ったと言えるだろうか？

お年寄りには座らずとも目的地に辿り着くことは出来ただろうし、

その友人はきつと別の方法で行動の指針を固めただろう。

僕は常々、本当の意味で 例えば人生を左右するような大事で

人の役に立ちたいと思っていた。

今日も、彼女はアザを作ってきた。

そのことについて僕が訊ねると彼女はいつものように言葉を濁してただ笑った。彼女の、その取り繕うような表情が僕は嫌いだった。

僕と彼女はいわゆる出会い系サイトを通じて知り合った。数回会

って酒と互いの愚痴を呑み込むうちに僕は彼女を知り、そのうち愛するようになった。

彼女もまた僕を受け入れた。ただ彼女は既婚者だ。そして夫からDVを受けていた。彼女は自分からそれを明かさなかったが容易に察しがついた。

「そいつを殺してあげようか？」

僕はベッドに横たわる彼女の耳元で囁くように言った。

彼女は無言で目を伏せて眠った振りをしていた。

僕は気付かれないように彼女のバックに盗聴機を忍ばせた。それがDVの詳細を聴かせてくれた。

もう間違いない。そいつを殺そう。

新しいナイフを買った。刃渡りの大きい登山ナイフだ。

その夜、彼女の携帯電話を見た。データフォルダにある写真を探し出してそいつの顔を確認する。彼女の愚痴に出たことから僕はそいつの帰宅する時間が夜中の2時前後であることを知っていた。彼女を抱いたあとに僕はそのあとを尾行した。僕のアパートからそう遠くない、そう閑静と言える住宅街に彼女は住んでいた。僕は怪しまれないように住所だけを確認するとすぐに立ち去った。

僕は何週間に一度か散歩を装い、2時頃にそこを一度だけ往復した。そして毎回その奥にあるコンビニに寄って何か買い物をして帰ってきた。彼女の夫とは何度かスレ違ったが、僕は確実に殺れる機を待った。

その晩は運がよかった。一瞬だった。コンビニの帰り、僕はそいつの背中側から喉を貫いた。心臓や頭でなかったのは声を出させないためだ。ナイフを引き抜くと血が飛び散った。返り血を浴びたが幸い帰り道では誰ともすれ違わなかった。

僕は風呂に入り缶ビールを一本だけ空けて、寝た。
全てが噛み合った夜だった。否、そういう夜を僕はずっと待った
のだ。

目撃者は居ない。凶器は布を被せた上から金槌で粉々に砕いてト
イレに流した。返り血を浴びた服は洗濯して簡単に血を流してから
切り刻んで、少しずつゴミに出した。

彼女に会った。もう夫の目を気にする必要はないから堂々と僕の
部屋で。新しいアザが増えることをもうない。だけど彼女はどこか
やつれた様子だった。

何かが、変だ。

僕は警察に捕まった。理由がわからない。いきなり令状を突きつ
けられ家宅捜索が入った。だけど僕のアパートには何一つ証拠は残
っていない、はずだった。

渴いた、血だらけの手袋が見つかった。

そんなはずはなかった。なぜなら僕は手袋を使わなかったからだ。

ああ　そうか。僕は理解した。

裏切られたのだ。

私は彼に目をつけていた。

「そいつを殺してあげようか？」　そう囁いた彼の口調はどこか幻

のようで、それでいて彼が本気で言っていることを確信させる何かがあった。

私がそんな男を探して何人も男と夜を共にしたことを彼は知るよしもないだろう。

それからの彼は、狡猾で周到で悪魔じみていた。私はもつと簡単に彼が警察に捕まると思っていたのだが、警察は事件と彼を結び付けることさえ出来ていないようだった。

証拠が一切ないらしい。喉元に穴の空いた死体以外は何も残っていないかったようだ。

私も容疑者の1人となった。しかしDVを知らない警察には私が彼を殺害する動機が薄いと思われ、あからさまな疑いをかける根拠に欠けていた。

だから、彼に対する切り札が見つからないようにすることも容易だった。夫の血に染まった安物の革手袋だ。それは夫がかつて私に包丁を向けたさいに誤って自分の手を斬りつけてしまい私がこういうときのために用意した物だ。

そしてしばらく日を置いて私は彼の部屋にそれを隠した。彼は危険だ。私を殺し兼ねない。

もし彼が警察に捕まり自首しても私が殺人を教唆した事実は存在しない。シラを切り通すことが出来る。そう考えた。

そうして私は別の男の腕に抱かれた

彼女が、僕ではない男に度々会っていたことを、僕は当然知っている。彼女はカバンに仕掛けた盗聴機が存在に気づいていなかったのだから。

僕に彼女を恨む気持ちは全くなかった。

むしろ僕のことなど忘れてその男と幸せになれたらいいなと思っ
た。

そうして僕はおそらく生まれて初めて、誰かの役に立てたのだか
ら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2998i/>

小さな親切、大きなお世話

2011年1月14日04時13分発行